

Title	潜在意識に就いて
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.1 (1909. 2) ,p.55- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090201-0055">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090201-0055</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

54 this principle is effectively used to encourage thrift, and is capable of vast extension. Liable to great abuse, therefore to be used with utmost circumspection, it seems destined powerfully to aid the growth of providence.

The emergence of these three principles—*risque professionnel*, actuarial administration of provident funds, social liability for a share of costs in certain forms of providence—represents immense progress. They require government regulation and supervision of provident funds to assure safety and make them fully Effective. Their further development and wider application must therefore contract the scope of charity, expand that of providence and so secure for an increasing proportion of people a safe and secure basis of independent existence. This is supplanting negative with positive social forces.

### 潜在意識に就いて

川 合 貞 一

「殆んど如何なる學問にも、今日では神秘的な對影<sup>シャドウ</sup>が存してゐる。あらゆる科學の模範たる數學ですらも、此の神秘的な時代の特色を免れることは出來ぬ。圓を正<sup>ソクドラン</sup>四角形に爲すと云ふ、古い數學上の神秘説が、今なほ存してゐるのみならず、ガウスや、リーマン、ヘルムホルツ以來、假説的な第四の Dimension なるものが、眞面目な科學的考察の範圍に入つて來た。吾々の用ゐて居るオイクリッドの幾何學によると、點は三つの坐標<sup>コオーヂネーテシ</sup>によつて定まるのであるが、所謂 *Metamathematik* では、*N-Dimensionen* の空間が存すると云ふのであるから、其の點は *N* の坐標<sup>コオーヂネーテシ</sup>によつて定まるのである。かゝる思辯は、ガウスや、リーマンや、ヘルムホルツに於いては、嚴密な科學的のものたる範圍を出でなかつたのであるが、ツェルナーの *Metageometrie* では、非常な神秘的なものとなつた。ツェルナーの四つの *Dimensionen* を具へた空間は、全く空想的な

天文物理的宇宙構造説に流れ入つて、正しく心靈説や隱秘敎の中に入つて了うこととなつた」とルードヅヒ、シユタインが述べてゐる如く、心理學に於いても、潜在意識と云ふやうな神秘的なものが存してゐるのである。實を云ふと、潜在意識必ずして本來神秘的なものではなかつた否、神秘的のものとせやうと云ふ考から起つたものではなかつたのであるが、それが變態心理の研究者や、所謂心靈の研究者によつて、段々靈妙不可思議な働を爲すものと考へらるゝやうになつたのである。殊に興味のあるのは、潜在意識と *Metamathematik* の第四の *Dimension* とが結び付けられて、潜在意識は第四の *Dimension* を通じて働くことが出来るからして、現實なる意識の達し能はぬ處に達し、現實なる意識の爲し能はぬ事と爲すことが出来る、とまで信ぜらるゝに至つたことである。

## 二

潜在意識と云ふものが、果して存してゐるであらうか、とは近來心理學者によつて頻りに論ぜられつゝあるが、さりとして、潜在意識なるものを以つて近比起つたものであると想像してはならぬ。一體、潜在意識と云ふ考の萌芽は近世哲學に其の端

を發し、それより心理學の中に入つて來たものである、されば潜在意識を説く所の人々に於いて潜在意識其の物が現はれた譯ではない否、潜在意識の根本の考へは、*petites perceptions* で以て意識を説明せやうとした、ライヴニッツに於いて始めて明かに現はれて來たものと云はざるを得ないのである。で、潜在意識なる概念の發展して來た歷程を略言すると、始めには *petites perceptions* として知られ、次に無意識（セリコンシエンス）（茲に無意識と云ふのは、心理學的意義で云ふので、ハルトマン流の形而上學的意義で云ふのではない。ハルトマンの無意識と云ふのは、萬有の本源たる所の絶對であつて、無機界、有機界は勿論、心的生活の中に於いても働いてはゐるが、直接に吾々の意識には上らぬ所の力である）となり、近比に至つて、潜在意識と稱へらるゝやうになつたのである。

かゝる關係の存してゐるのであるから、潜在意識を論ずるに先ち、ライヴニッツの *petites perceptions* に就いて一言するも、決して無益の事ではない。少しく哲學の歴史を學んだものは、何人も知るが如く、ライヴニッツは *Monadon* と稱する形而學的の原子で、以つて萬有を説明せやうとしたのであるが、其の *Monadon* なるものは表

象方で表象するのが其の本質であり其の活動であるところのものである。所が、*Monaden*の表象力に無限の階段があつて、最下級の者になると、不明晰な無意識的表象を生ずるより以上の活動を爲し得ないのである。云はゞ失神をしてゐるか、睡眠してゐるものである。それより表象力が進んで意識的感覚となり、記憶を伴ふに至ると *Monaden* は靈魂と云ふ名を得、而してそれが自意識を有し、理性を有するに至ると精神と稱へらるゝに至るのである。然し上級は常に下級を包含してゐるのであるから、精神の中にも幾多の不明晰な、不明な表象が存してゐるのである。此の不明晰、不明な表象が即ち *petites perceptions* と呼ばれるゝ所のものである。ライヴニッツは之を説明するに濤聲を以てした、曰く吾々が海岸に於いて聴く所の濤聲なるものは一つ一つの浪の音の重なつたものである。所が一つ一つの浪の音は小さくして吾々の耳に聴き取ることの出来ないものである。然るに、其の小さい浪の音が重なると、耳を聳するばかりの轟々たる濤聲となるのである。一つ一つの浪の惹起す感覚は弱くして且つ錯亂し、感ずることの出来ない小さい表象 (*petite, incensible perception*) であるが、それが結び付くと、強くして明晰となり意識に

上るのであると。

此の *petites perceptions* なるものは、其の根本思想に於いては素より形而上學的考察より出て来たものであるが、それが少なからず近世心理學の上に影響を與へて、無意識、委しく云ふと無意識的精神生活と云ふ概念となり、幾多の心理學者によつて説明上の假説として採用せらるゝに至つたのである。所が、主として變態心理學の方面より、無意識なるものが潜在意識と呼ばれ、現實なる意識の下に潛んで不可思議な作用を爲す所の第二と我と考へらるゝやうになり、異常な精神現象はもとより、あらゆる精神生活を之で以て説明せやうとするに至つたのである。

### 三

潜在意識なるもの、成立の由來は略前に述べた如くであるが、さて、それが今如何なる理由、如何なる事實の上に主張せられつゝあるか。これより、其の主要なる點に就き次を逐うて之を検討せやう。

(一) 潜在意識の存在を主張する人々は、所謂二重人格なるものを以つて其の證左となさうとしてゐる。ビーネーでも、ジャーネーでも、デッソアでも、シヂイスでも

皆それである。一體、二重人格と呼ばれる、状態には、二つの場合がある。一つは二つの人格が交々現はれると云ふ場合で、一つは二つの人格が同時に現はれると云ふ場合である。

前者は例へばシュレーダー、フォンデア、コルクが取扱つたと云ふヒステリー患者の如き即ちそれである。同患者は、ある日醒覺の後、舞蹈病的運動を起し、手を調子よく左右に打振つてゐたが、半時間もたつと我に歸つて全く子供のやうな振舞をするやうになつた。翌日になつて、癡學が屢起り、それが終ると分別のよい一少女となり、佛語も話せば獨逸語も話し、物知りなることを示した。が、すぐ前の日の事は少しも知らなかつた。之に反して子供となつた時には以前の子供になつた日の事をよく記憶してゐたと云ふことである。

潜在意識を探る人の説明によると、かゝる現象は、正常の状態に於いては意識されずに存する所の、第二の意識即ち潜在意識なるものが主となつて現はれたのだと云ふのである。

後者は例へばデッソアが渠の“Das Doppel Ich”の中に例に引いてゐるパークワース

の場合の如きものである。パークワースは熱心に談話をしながら計算をすることが出来たと云ふのである。デッソアは之に就いてかう云ふてゐる。パークワースは計算の際、計算しつつ、あると云ふ意識を有してはゐないが、然かし之を爲すからには、數の記憶が存してゐなくてはならぬ。されば計算をするのは第二の意識であつて、談話は第一の意識で之を行ふのであると。

所謂二重人格と稱せらるゝ事實其物に就いては最早争ふの餘地はない。唯、議論の存する所は、かゝる事實を基礎として、デッソア等の考へるやうに、人間の人格と云ふものは、吾々の意識には統一したものとやうに見えるが、其の實、少なくとも二つの明かに分つことの出来る人格から出来てゐる、而して各の人格がそれ自づからの記憶を有つてゐると見らるべきものであるか、否やにゐる。

一體變態心理學の上で二重人格と云ふは、決して意識を有するものが二のものもあると云ふ譯ではない。唯、吾々の唯一の意識が二つの人格として現はれると云ふに過ぎないのである。然るに潜在意識を主張する人は、之を以つて意識其物が二つあつて、それが各の人格となつて現はれるものと考へてゐるのである。若し吾々の



る。(cf. Jastrow, Facts and Fable in Psychology, pp. 307-336) されば吾々が注意をある一語に集注してゐるやうな場合には何等の意識的努力なくとも其文字の書けて來ることのあるのは敢て奇とするには足らぬ。然るにプランシェットの使用に熟練したる人の言ふ所によると、プランシェットに手を置いて心を虚うしてゐると、自づからにも驚かるゝやうなことで書けて來ると云ふのである。が、こは如何にして起るのであらうか。吾々は之を全く暗示作用に基づく者に外ならずと考へるのである。心を虚うするのは即ち暗示され易き催眠状態に近い状態に入るのである。ジエームス博士は曾てオートマチック、ライチングの場合に於いては手は無感覺アンキネシアになると云ふことを證明した (Proceedings of the American Society for Psychological Research, vol. 1) のであるが、之を以つて見ると外界よりの暗示、若くは自己暗示オートサグネーションによりて文字を書くのであるけれども、手が無感覺となつてゐるから之を感じないのである。これに似てゐるものにデールブルターニングと云ふがある。テーブルターニングと云ふのは人が手を机の上に置いて一心を込めてゐると、机が自づから動き出すを云ふのである。これはフアラデーが既に證明した通り (cf. Scripture

New Psychology, pp. 253-255) 知らず識らず自分で机を動かしてゐるのであるが、之を感じないのである。

自動的書寫并にそれに似た現象が、如上の理由で以つて説明され得るものとするれば、不可解なる潜在意識なるものを採る必要はありはしないのである。

(三) 潜在意識論者は、記憶なるものは潜在意識によるにあらざれば説明すべからざるもの、従つて、記憶の存することは、潜在意識の存することを證明する者と考へてゐるのである。成程、吾々の記憶に於ては心的經驗がいつれの處にか保存せられ、而してそれが再生するやうに見えるのみならず、クラフト、エイピングの研究したイルマなる者は、精神が催眠状態に在る間にはマデアールの歌を歌ふたりすることが出來たのであるが、然かし、再び其の状態に入るまでは、自分の爲した事に就いて何等の意識をも有つてゐなかつた、と云ふやうな事實の存する所を見ると、記憶は潜在意識に於いて保存されてゐるのであると云ふ、潜在意識論者の主張が一應道理あるが如くに思はれないではない。然かし此の場合に於ける潜在意識なるものは、多くの心理學者が記憶を説明するに取つてゐる心的傾向メンタルアシムションと同じく、つまり

へエフテングが彼の心理學の中に述べてゐる、『物的現象の系列は突然止まるとなくして大脳の現象の形に於て引續いてゐるのに、心的現象の系列が突然止まり、或は先だつ所の同じ性質の現象によつて規定されずして、恰かも魔法によれるが如く始まることは許すべきではない』と云ふやうな、心的生活連續の哲學的思辯に基いてゐるのであつて、現實なる事實其物に基づいてゐるものではない。現實な事實の示す所によると、心的過程は大脳の過程があつてそれで以つて起つて來るのである。例へば、吾々が外物を知覺するやうな場合には、感官に受けた刺激が傳達せられて大脳の活動を起し、而して知覺作用が始めて起つて來るのである。してみると、心的現象は同じ性質の現象によつて規定されずとも、恰かも魔法によれるが如く、始まり得る者であるとも云はなければならぬ。記憶の場合に於ても然りて、決して過去の経験が潜在意識に保存されてゐるのではない。唯過去の経験が大脳の分子活動の習慣として保存されてゐるに過ぎないのである。(cf. Milnerberg, Grundzüge der Psychologie, S. 222-224.)

シヂスは記憶を以つて、過去の経験の再生ではなくして、過去のものたるの性質を有する現實なる現在の経験である。と考へ、而して過去其物は現在の刹那的意識の内容に於ける一部分であつて、其の中に自づからの現在の経験が投出せらるゝのであるとなし、此の投出作用を爲すものが即ち潜在意識である。(cf. Sidis, The Psychology of Suggestion, pp. 126-128)と考へたのであるが、然かし、これは外物の知覺に於いて、之を外界に投出する作用を爲すものは潜在意識であるとの考と同じく、心理學上承認すべからざるものである。何んとなれば回想の過程に於いては、自づからの現在の経験が潜在意識の作用によつて現在の主觀的過去の中に投出せらるゝのではなくして、表象の内容、インテリゲンシア親知の感及び内容に伴ふ聯想によつて、即ち現實なる意識作用によつて、過去との關係が付せらるゝに過ぎないからである。

してみると、記憶の事實を以つて、潜在意識の存在を證明せんことは、全然不可能であるとも云はなければならぬ。

(四) 本能に於いては、目的が意識せられざるに自づから目的に適へる行動となつて現はれる所から、之を以つて潜在意識の存在の理由となさんとするものがある。然かもこれ謬れるの甚しきものと云はざるを得ぬ、何となれば目的に適へる行動



が存すればとて、其目的を思慮する意識がなければならぬと云ふ理由は、一も存してゐないからである。かのヴント等が本能はもと目的を意識したる行爲であつたが、反覆せられ遺傳せられた結果として、其の目的を意識せざるに至つたと云ふ説は、つまりは同じ謬より來たものと云はざるを得ぬ。若し目的に適へる行動の存するを以つて、意識の存するものと爲さざるを得ぬものとすれば、植物にも意識がある者と爲さねばならぬことになるのである。何となれば植物でも一般に圈象の刺激に對して、吾々の眼には頗る辨別力を有し、目的に適へる如く見える反應を呈することが出来るからである。例へばかの日廻草が太陽の回るに従つて動くが如きは、目的に適へるものとも見られるではないか、然かし、決して意識あつての作用ではなく、ローエ教授が説明してゐるが如く、唯、物理的化學的過程に基づく所の傾動であるのだ。(cf. Loeb, Comparative Physiology of the Brain and Comparative Psychology) pp. 1-14 而してかゝる傾動は如何なる有機體にも存じ、それが神経系統を具ふるに至つてますます複雑な結果を生じて來るのである。詮ずる所本能なる者も傾動づいたもので、それに意識を伴つてゐるに外ならぬのである。されば、本能に

於いては目的を意識せざるに、自づから目的に適へる行動となつて現はれるの故を以つて、潜在意識の存在を證明するものと爲すことは出来ぬ。

(五) 精神物理學的實驗の結果によると、刺激は一定の度に達せざれば意識に上らぬ所から、識阈以下の刺激は潜在意識に受納せられるのだと云ふ説が起つて來た。こは正しく前に述べて置いた、ライヴニッツの *petites perceptions* の説に外ならぬのである。かゝる形而上學的物心并論に於いては、物的過程には必らず心的過程が並行してゐると云ふのであるから、縦ひ意識には上らぬにもせよ、心的過程の存するものと爲さざるを得ぬのであるが、然かしこれは全く證明すべからざることである。(cf. Wundt, Grundriss der Psychologie, S. 371-375) されば、識阈以下の刺激が存すると云ふ事實は、潜在意識の存在の證明には何等の力をも與ふるものではない。

#### 四

以上述べ來つた所で、潜在意識の存在を證明するに當つて、主張せらるゝ主なる點を檢討し、了つたのであるが、これで見ると、一も潜在意識の存在を證明するには足らないのである。されば潜在意識と云ふやう概念は、心理學上に於いては全く無

用の長物である。否、かゝる概念が存する所から、迷信者流によつて靈妙不可思議の働を爲す所のものと曲解せられ、精神感應も、天眼通、天耳通も此の潜在意識の妙用であるとして考へらるゝに至つたのである。洵に笑ふべきの極である。勿論吾々としても、ある種類の精神感應、ある種類の天眼通、天耳通の存することを否定するものでない。然し此等は決して心靈の研究者が考へるやうな性質のものではない。蓋し、ある種類の精神感應は日々に行はれてゐるもので、吾々が言語により、舉止によつて互に思想感情を通じつゝあるのがそれである。かう云ふもの以外に何にも不思議の現象が存して居る譯ではない。若しありとすれば、唯幻覺に過ぎないのである。それから天眼通、天耳通と云ふやうなものも催眠状態などに入ると、ゾントの所謂統覺中樞の働が弛んで、感覺中樞の亢奮を起す所から時に現はれて來る現象であつて、常人の眼力、耳力の達せない所の物を視、聽きすることが出来るのである。が何にも不思議なものではない。然かし世に不思議なものがありとすれば、意識生活其物である。否、意識生活によつて燃ゆる所の Π ο σμυθηδός の生の火こそ、恐らく吾々には永遠の神秘であらう。

## 減債基金の眞價

星野 勉 三

夫れ公債の償還は單に理論上より云へば必ずしも必要にあらず而して過大ならざる公債の存在は却て國民經濟を利すること大なり何となれば此の如き場合には公債は放資の目的物となり以て資本蓄積の機會を與ふればなり又公債の償還は只に不必要なるのみならず却て有害なる場合なきにしもあらず即ち國家の財政に餘裕なく爲めに已むを得ず高利の公債を募集して舊公債を償還する場合の如き又は重要な國費を節約し國務の遂行を妨害して迄も強て償還を行ふが如き又は強て之を行はんが爲めに租税を増徴して國民の負擔を大に増加するが如き又は國民經濟に資本の剩餘あるに際して之を行ひ爲めに國民は過多の資本を利用する方法を發見すること能はず却て投機の如き不健全なる放資を促す場合等の如き之れなり。

夫れ此の如く公債の償還は必ずしも必要にあらず又却て有害なる場合ありと雖